

関西学院大学 研究成果報告

2024年 10月 2日

関西学院 院長殿

所属： 文学部
職名： 教授
氏名： 宮下博幸

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ドイツ ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	ドイツ語の項構造構文の総合的研究
研究実施場所	ドイツ・デュッセルドルフ大学
研究期間	2023年 9月 4日 ～ 2024年 8月 19日（ 12 ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究課題は、英語を中心に発達してきた構文文法 (Construction Grammar) の枠組み、特に Goldberg (1995) によって展開された構文文法の枠組みに基づいて、ドイツ語の複数の項構造構文を分析しようとするものであった。この研究課題を進めるにあたっては、まず構文文法それ自体の理論面での課題と、実際のドイツ語項構造構文の分析の課題の二つの課題の設定が可能であった。そこでまず前者の構文文法の理論面での課題に取り組むこととした。Goldberg (1995) から読み取ることができる構文文法の理論面の課題は、1) 動詞と構文のマッチング、2) 構文間の関係、3) 構文の生産性の問題の3点に集約可能である。ここにさらに4) 構文の新たなとらえ方に関する課題を加え、これら4つの課題に順に取り組んでいくこととした。

まず1) の動詞と構文のマッチングの課題に関しては、関連する文献購読を行いながら、この問題に対する本研究の基本的な立場を明らかにする作業を行った。上記の構文文法においては、動詞の意味はフレーム意味論的に規定されるフレーム意味とされる。そしてこの動詞の意味と、構文の意味とがマッチングした場合に、容認可能な文が形成されることが考えられている。このような前提に立ちつつも、Goldberg はこのマッチングを論じる際に、動詞が有するフレーム意味に重きを置かず、動詞が有する参与者役割 (participant role) と構文が有する項役割 (argument role) を想定し、両者が融合することで文が形成されるというモデルを提案している。本研究においてはこの提案を検証し、Welke (2019) なども指摘しているように、Goldberg の提案のように動詞に参与者役割を認める必要はないという見

解に至った。その代案として、フレーム意味が構文によって出来事の見方 (construal) を与えられ、文の形成はこの両者の意味的な整合性と、構文が通常どのような動詞と使用されるかという傾向から導き出しうるとするモデルを提案することができた。以上の点は今後モノグラフとしての公刊することを見込みつつ、英文で執筆した。

次に2) として挙げた課題である構文間の関係について取り組んだ。Goldberg (1995) では構文間の関係について、4つのリンクを中心に論じられている。構文間の関係については、近年 Diessel (2019) などのネットワーク的な見方を中心に、活発な議論が行われている。しかし近年の研究と Goldberg の提案する4つのリンクとの関係はこれまで詳細に論じられておらず、不明な点が多い。本研究では、先行研究を吟味する中で、構文の形式と意味のそれぞれのレベルに関してリンクを想定することを前提としたモデルを着想し、このモデルに基づいて、Goldberg の提案と近年の構文間の関係に関する研究の提案を結びつけることを試みた。この研究成果はデュッセルドルフ大学のコロキウムで発表し、教授陣と意見交換を行うことができた。またこの課題は特にアクチュアルなテーマであることから、論文として英文でまとめた。この論文は近日中に国際誌に投稿を予定している。

さらなる理論面での課題である3) 構文の生産性と4) 構文の新たなとらえ方に関しては、以下に述べる研究にも時間を割く必要があったため、残念ながらさらに進めることはできなかったが、その主要な文献はすでに収集することができており、今後の継続的な研究の土台を形成することができた。

二つ目の大きな課題であるドイツ語の項構造構文の分析に関しては、この十年来、一貫して研究を進めてきているが、本研究ではこれまで十分に扱っていなかった他動詞構文と二重目的語構文について重点的に考察を行った。ドイツ語の他動詞構文は数量を表す動詞や天候動詞など、意味的に他動性が極めて低い出来事にも用いられる。このことからドイツ語において他動詞構文は2項動詞のテンプレートとなるほどにまで抽象化が進んでいると考えられるが、これを近年構文文法において議論される「意味のない構文」の議論 (例えば Hilpert 2014) と結びつけて分析をおこなった。この研究成果はデュッセルドルフ大学のコロキウムにおいて発表した。コロキウムでは教授・講師陣から極めて有益なコメントを得ることができた。二重目的語構文に関しては特に Goldberg (1995) で記述されている英語の二重目的語構文とドイツ語の二重目的語構文を比較する形でドイツ語の当該構文の特徴を分析し、日本帰国後すぐに開催された国際セミナーにおいて成果発表を行った。

本研究滞在では以上のような大きな成果が得られたが、さらに当初の研究計画にはなかった、大きな収穫もあった。そのうちの1点目は、デュッセルドルフ大学の研究室で知己を得た同大学研究員の Julian Stawecki 氏 (専門はコンピュータ言語学) との共同プロジェクトが成立し、滞在時からこのプロジェクトを推し進めたことである。このプロジェクトは電子コーパスのデータの中から、そこに含まれる文の項構造を自動的に同定するパーサ (解析システム) を開発しようとするもので、このツールが完成すれば、本研究が今後飛躍的に進歩すると考えられるものであり、またドイツ語の辞書記述など、他の目的にも極めて有用となりうる。このプロジェクトに関しても、デュッセルドルフ大学のコロキウムにて Stawecki 氏と共同発表を行った。さらにこのプロジェクトは日本フンボルト協会の奨学金プログラムに採用され、この奨学金を利用して来年の3月に Stawecki 氏が来日し、言語処理学会において共同で研究発表を行う予定となっている。

さらに滞在中はこれまで築いてきた研究上のネットワークにより、2か所で招待講演に招かれ、講演を行った。一つ目の招待講演は2024年3月にオランダ・ネイメーヘンのラドハウド大学にて、“The German modal particle *denn* as an emotional marker” というタイトルで行った。これはドイツ語に特有な「心態詞 (modal particle)」のうち、特に頻度の高い *denn* の主要な機能が感情のコード化であると論じるものであった。現地では活発に意見交換が行われ、非常に有益な講演会となった。二つ目の招待講演は2024年7月にドイツ・マインツのマインツ大学にて、“Das konzessive *gut*: eine emergente Konstruktion” というタイトルで行った。こちらでも現地の研究者から活発に質問が出され、有益な議論をすることができた。

以上を総括するなら、今回の滞在は当初予定していた研究を推し進めるだけでなく、今後の研究への展望が大きく開ける貴重な機会となったことを報告する。